

## 史上のファウスト (II)

——彼の救済とファウスト文学の展望——

大 木 実

### Vom historischen zum literarischen Faust

——Seine Erlösungsgedanken und die literarische Entwicklung der  
Faustgestalt von Christopher Marlowe bis Thomas Mann——

Minoru OHKI

「史上のファウスト (I)」は一般教育部研究会々誌第 10 号に発表されたものであるが、なお論ずべき若干の問題を残しているが故に、引き続き論述解明し度い。

(1) の最後の部分で述べたように、Faust 博士の物語は、前文学的段階から 1587 年の Faustbuch を経て 20 世紀の Thomas Mann や Paul Valéry の作品に至るまで、ヨーロッパ文化、世界文化に大きな役割を果たしてきた。ゲーテの Faust は世界 50 カ国語以上に翻訳され、ドイツ詩文学の頂点に位置し、Faust 文学はそれのみにて、優に一個の世界文学史を形成するに充分である。併しその主人公 (Titelheld) たる「史上の Faust」は必ずしも幸運な生涯をおくったわけではなく、ルツターの前科学的時代である当時において、既に現代科学の考え方に近い極端に進歩的な考え方、人生観、世界観を持ち、臆することなく彼の考えを開陳披瀝し、実践したにもかかわらず、その内容のみならず発表態度の自由奔放の故に、却って多方面からの反撥をかい、幸運は阻まれ不遇な生涯を送り、はては悲惨な最期を遂げなければならなかった。かくて彼は後世の文学者たちから暖かい救済の手が、作品の中で、さしのべられることになる。彼等は Faust 救済の問題を Faust 文学の容器に盛り、その系譜が Faust 文学史を形成するようになったのである。然し果して Faust は本当

に救済されたのであろうか。この問題は Faust の名を冠することがない、聖書やギリシャ神話と共に古く、現代科学と共に新しい問題でもある。Faust は遍ねくゆき亘った宗教の時代にあつて、科学的認識に目覚めた先覚者であったが、科学思想が世界のすみずみまで拡がっている科学的、余りに科学的な現代にあつて、如何なる役割を果たすであろうか、以下この問題に関して Erich Heller の“Faust's Damnation: Morality and Knowledge” (1962) を参照しつつ論述していきたい。

序文の末尾において触れたように、「史上の Faust」はヨーロッパ特にドイツの封建社会と宗教との狭間に封じ込められていた「学問・知識一般」を解放し認識の自由を發展させようと試み、実践と公言を敢てしたため、宗教改革時代に相争っていた新旧両宗派から共に疎外され迫害を受けた。

しかし彼をとりまく一般大衆からは、或いは拍手喝采を受け或いは非難攻撃をこうむった。しかし立ち入って国民大衆に対して密接な関係があったかどうか、彼等に特別な関係を持っていたかどうかということは更に究明を要するとされている。彼は一般に詐欺師、無産者、浮浪者、膨張しふくれ上った軽量者などと称せられた。大学アカデミズムからは門外漢として誹り